

## ●春日部市民文化講座（第37回） 『和敬清寂』の侘びの世界

◆日時：2021年10月27日(水) 10時（ぼぼら春日部4階会議室）～12時

## ■「和敬清寂」の侘びの世界

今日は非常に曖昧な「侘びの世界」、さらに「和敬清寂」について考えていきたいと思います。皆さんも「和敬清寂」という言葉は聞いてはいると思いますけれども、「何だいそれは？」というような四字熟語です。このことは、ぼくがお茶を始めてからずっと考え続けてきたテーマで、哲学の世界で、結論が出ないのですね。侘び茶をどのように自分が具体的に受け入れたらいいかという時に、誰かが「和敬清寂じゃないの」って言ったというような、訳の分からない言葉なのです。

春日部市民文化講座 2021年10月

## 和敬清寂の侘び茶の世界

## 和敬清寂の出典

巨妙「茶祖珠光伝」1699年（元禄12年）頃  
南宗寺の僧で武野紹鷗の外孫

## I. 「利休に帰れ」の渴望

1. 元禄文化
2. 昭和の末から平成、令和の文化を考える
3. ソドム、ゴモラの文化

## II. 家元制度の強化と侘茶

1. 三千家の侘茶
2. 「利休に帰れ」の四定 和敬清寂
3. 家元制度と十職

## III. 侘茶のコロナ対策

1. 和敬清寂
2. 自分をもてなす自服の茶
3. 高山右近の禁教令に伴う茶人の姿

## 結び

が庶民の間でも知られるようになったかという、この頃に「利休に帰れ」運動というのがあったのです。キリスト教会でもプロテスタントが誕生したのは、それまでカソリックしかなかった中で、もともとのイエス様の福音に戻ろうよというムーブメントがプロテスタント運動だったのです。でも、これは日本人には難しいですよ。カソリックとプロテスタントってどう違うの？というのが初歩的な質問でよくあります。だけど、そんなことを思っていない人も多いのですよ。学問の世界でもそうですが、原点に戻ろう、オリジナルに戻ろうよという気持ちが出てくるのですね。それが特に茶の湯では元禄時代に猫もしゃくしもというか、落語で揶揄されるくらいに茶道人口が増えて茶の湯が流行った訳ですよ。長屋のご隠居さんが茶の湯を知ったかぶりして笑いものになるという噺ですけどもね、そういう世界が生まれてきたのが元禄時代です。そうした「利休に帰れ」というムーブメントの中で、「和敬清寂」という言葉が突然浮かび上がってきたのです。その頃、「一期一会」は一般の人たちの中でも通じていたのですが、「和敬清寂」という言葉や思想は大衆文化に合わないので使われていなかったのですね、それが突如として出現してきたのです。

## ■家元制度の強化と侘茶

そして、この頃に家元制度が確立していくのですね。表千家、裏千家、武者小路千家の三千家がそうです。こうして元禄時代に茶の湯が大衆化する中で、茶の湯の原点はなんなのか、本物はなんなのかということが求められる様になったのですね。ぼくは元禄文化とは「頽廢的・大衆文化の成熟時代」だと思っています。頽廢的・大衆文化が社会の中で幅を利かせていた時代だと認識しているのです。これは、レジュメにも書きましたように、5代綱吉の時代で、上方の人たちを中心として貨幣・商品経済が発展して、商人が台頭してくるのです。今の日本で伝統的文化・芸能と呼ばれるものも、この時代に生まれているのです。歌舞伎や落語なんかもそうですね。松尾芭蕉の俳諧もそうですし、井原西鶴の浮世草子なんかはエログロナンセンスですよ。でも、庶民がそういうものを待ち望んでいたのです。

## ■「和敬清寂」は元禄時代に流行った

「和敬清寂」という言葉がでてきた時代というのははっきりとしませんが、この言葉が流行りだした時代というのは元禄時代に入ってからです。巨妙(きよみょう)という人が「茶祖珠光伝」という本を遺して、その中に出てきます。この巨妙という人は、武野紹鷗の外孫だと言われている堺・南宗寺の僧ですが、これも良く分かりません。これが三千家でも受け入れている出典です。ただ、茶の湯の世界の辞典などでは、村田珠光が創唱して、武野紹鷗が受け継ぎ、千利休に伝わり、江戸時代初期に流行ったとし、角川茶道大辞典では「和敬清寂」を仏教の哲学で「和」「敬」「清」「寂」のそれぞれを説明しています。それは、当時、キリスト教が禁制の哲学であったからですね。ぼくはそれに疑問を持ったのです。ぼくが疑問を持ったのだから、高山右近が「和敬清寂」を知っていたとしたら、こんな仏教的な哲学で納得できたのかなあと思っいろいろと調べてみました。高山右近だったら利休さんが言った「和敬清寂」を角川茶道大辞典にあるような説明で納得したかどうかと思うのです。

## ■「利休に帰れ」の渴望

それで、江戸時代になって何で「和敬清寂」という言葉

これは、昭和末期から平成、令和にかけての文化にも通じていると思います。色恋や浮気なども文学や哲学にまで創り上げていく、日本人には広がりがあるのです。それは何故かという、善悪という基準がないからです。何が良くて、何が悪いかという基準がないのです。元禄時代は、そういう基準が取っ払われて頽廢的で大衆文化が成熟した時代です。赤穂浪士の仇討ちだって、今で言えば大量殺戮ですよ。でも、当時の江戸の庶民は喝さいした訳でしょ、為政者は困りましたが。今の時代だったら、あの仇討ちを忠義とは言わないでしょう。みんな刑務所入りですよ。

### ■ソドムとゴモラの文化

善悪がはっきりしない時代という、旧約聖書の中にある凄惨な物語があるのですよ。「ソドムとゴモラ」という都市で頽廢的な文化がはびこり、最悪な時代があったと言われているのです。皆さんは「カインの末裔」ということを知っているでしょう。旧約聖書に登場するアダムとエバたちの子にカインとアベルという2人の息子がいて、カインが神の寵愛を受けた弟のアベルを嫉妬から殺してしまうのです。人間は、そのカインの末裔で嫉みや憎悪という罪深い心を持つものとしての教訓で語られるのですが、実際にカインの6代後の末裔にヤバルとユバルとトバルカインという人たちが登場します。この中で、ユバルは堅琴と笛を巧みに奏でて、音楽がなかった時代に音楽を作りだして先駆者になりました。ヤバルは、天幕を張って遊牧の羊飼いと経済的な豊かさを持つのです。トバルカインは鉄や銅を鍛えて刀剣や武器を造る者になり、それがやがて争いにつながっていくのです。こうしてカインの末裔から現代につながる文化が発展して広まっていったのです。

### ■ただ湯を沸かして茶を点てて自ら飲む、そして

今、日本は敗戦後76年が過ぎて、当時瓦礫だらけの街だったところに今はビルが林立しています。元禄時代というのは、まさにそういう変化がいっぱい起こった時代なのです。そこに矛盾があったとしても、それを矛盾として感じなかった時代でもありました。それを人間の知恵で何とか流していったのです。そういう時代に「和敬清寂」という茶の湯の哲学が大事だよねえと言われるようになったのです。でも、あまり堅苦しいことを言っていたのでは、茶の湯を遊び、楽しみとして取り組むことはできないでしょう。美味しいお茶、美味しいお菓子を買ってきて、自分をおもてなしする事が茶の湯の根源であり、「和敬清寂」の根源でもあるのです。でも、こんな言い方を茶の湯の先生ってあまりいないのです。でも、お家元が本音をポロッと言うときに、利休さんと一緒のことを言うのですよ。「ただ湯を沸かして茶を点てて自ら飲む、そしてどうぞというのが茶の湯の真髄だ」と。自分で自分をもてなす。そして、美味しいと思ったら、傍にいる人に「お飲みなさい」と勧めれば、その人も茶の湯が好きになるのですよ。

### ■「和敬清寂」の序章

最初に茶の湯を習った人たちに始めた理由を聞くと「美味しいお菓子を毎回出してくれるから、それが楽しみで」という答えが返ってくるのです。そういう至極当たり前のことを当たり前にするのが「和敬清寂」という哲学の中にしっかりとあるのです。千家十職の中で頭を出しているのが樂家です。樂家は、長次郎から続く家柄で、先代15代の吉左衛門さんは代を譲って直入(じきにゅう)となりましたが、相当な自覚をもっている方です。樂美術館で「長次郎：樂焼の祖・長次郎四百年忌」が行われ、その展覧会が終わった時のことを樂さんは次のように語られています。

◇ ◇

《樂美術館で1988年に「長次郎四百年忌記念」展を開いたことが、作陶の転機になった》

長次郎の名碗が一堂に会しました。閉館後、館内を見回る。ある茶碗の前で足が止まる。見つめていると涙がこみ上げてくる。なぜ僕は泣いているのだろうか。仁清のように美しいわけでもない。織部のように形が面白いわけでもない。

### ◆元禄文化——頽廢的、大衆文化の成熟

元禄時代(1688-1704)前後、5代将軍綱吉の文治政治の下で、上方の町人を中心にした文化。貨幣・商品経済が発展、商人の台頭を背景に啓蒙と娯楽が求められ、遊里・芝居小屋も咲かんとなった。北村季吟・松永貞得らは古典研究によって旧来の知識を普及、貞門・談林の俳諧は庶民の実感をとらえ、松尾芭蕉は風雅の高みに達した。井原西鶴の浮世草子は好色・琴線を通じて世の人心を描き、上方の元禄歌舞伎は御家騒動で封建倫理を示し、江戸歌舞伎の荒事は東国の力を痛快に視覚化、大阪で人気を呼んだ。人形浄瑠璃は太夫・三味線・人形遣いの技能によって庶民層に浸透、いずれの文芸も滑稽味を含んでいる。なお、近松門左衛門の浄瑠璃や西鶴の男色物のテーマには封建社会下の忠義と私情の葛藤が見られる。▼学問では林家の朱子学に対する伊藤仁斎の復古学、荻生徂徠の古文辞学、ほかに農学・本草学・和算などが発達。尾形光琳の屏風・工芸にみる古典装飾美、京焼などの色絵の陶器・磁器、友禅染の衣裳など遊芸を楽しむ生活が彩られる。以上のすべてに出版が関与し、浮世絵版画・絵本を含めて、かつてない情報文化が成立した。(日本史辞典)

[高橋先生の講演資料より引用]

ない。曜変天目のように神秘的な光彩も放たない。美しいとか、力強いといった、あらゆる造形の成り立ちや意味を超越する力。捉えようとしても、既存の価値体系から長次郎は抜け出してしまう。[樂家に伝わる長次郎「面影」。「四百年忌記念」展にも出品された＝畠山崇氏撮影] 利休は、豊臣秀吉の勘気をこうむり自刃しました。秀吉が築く制度と価値の体系を、この黒い1碗が無に葬り去る。これほどの恐ろしい茶碗があるでしょうか。秀吉には理解できない世界。長次郎茶碗は利休の死の淵までともに歩んだ茶碗です。体制を否定する激しい意識っていうのかな。こんなちっぽけな茶碗が世の中と対峙(たいじ)して、政治や文化に及ぼすあらゆる体制の価値観を解体させ彼方へと突き抜けていく。この静けさの中に、そんな激しい思想を内包しているとは。戦慄し感動し感涙し、僕自身も変わっていきました。



### 《疎外感を作陶にぶつけた》

子供の頃から、何かが違うと思ってきました。他人から「お父さんの跡をつぐのよね」と決めつけられ、中学の先生には「樂はもう、将来が決まっているからな」と言われた。常に疎外感があって、「違うよね、違うよね。僕自身って一体何だろう」って思い悩んだ。それは懐疑や反抗を生み、その身動きのつかない有り様から、用の持つ優しさに助けられて創作する場に戻ることができました。「それがなんだ！」って。長次郎を知り、再び自分の表現が社会と対峙するようになりました。僕の茶碗はとんがり、牙を剥(む)き始めた。既成を破り、惰性となった意識を揺さぶり、そこに七首(あいくち)を突き立てるようになりました。【(語る 人生の贈りもの) 樂直入:9 長次郎に戦慄し、僕は変わった(朝日新聞 10月22日) ■陶芸家(15代楽吉左衛門)・樂直入(じきにゅう)より引用】

◇ ◇

ここに語られているのが長次郎作「面影」という黒茶碗です。このお茶碗は樂家に代々と受け継がれて大切にしてきたお茶碗なのですね。この静かな小さな茶碗が秀吉の権力を打ち破ったというふうに解釈されて直入さんは感じて、この茶碗の前で涙したというのです。この時の彼は、「面影」を超えたかったのです。今の権力とか何かがあるとすれば、それをぶち壊すような土の茶碗、温もりのある茶碗を目指していたのです。連載が終わったら、この語りまとめられて本になると思います。そして、その頃に直入としての展示会が開かれるのではないかと予想しています。その時に、樂さんも人の子だったなあと思えるような、これまでと変わった茶碗が出品されるのではみないかとぼくは期待し思っています。何故ならば、「和敬清寂」が求めている侘びの世界というのは、人の温もりのある世界なのです。皆さん、ここまでくどくどと話してきましたが、ここまではまだ「和敬清寂」の序章ですからね。

### ■ 「和敬清寂」を英訳してみると

ぼくは裏千家の大宗匠の教養の深さ、侘びの世界の深さというのは凄いと思いました。それは、英語圏の人たちに何とかして「和敬清寂」の侘び茶の世界を分かってほしいということで、英語で「和敬清寂」を説明しているのです。淡交社が出している『茶の湯英会話』の中で「和敬清寂」を英語で説明したのです。

#### ◆「和」= Harmony ◆「敬」= Respect ◆「清」= Purity ◆「寂」= Tranquility

この4つの説明を読んでいたら、これってキリスト教的用語じゃないのと思ったのです。それで、そうか裏千家の大宗匠はそこまで読んでいたのかと思いました。そこで、ぼくは自分の本『茶の湯の心で聖書を読めば』(Forest books)の中に自分の解釈と言葉で説明をしたのです。レジュメに綴ってあります。

#### ◆ 「和」 = Harmony

その中で「和=Harmony」というのは、何との和、誰との和なのかというと、ぼくのキリスト教徒としての理解は創造主と人間が断絶している、あらゆる調和を壊していることに気がつかなければいけないということ、断絶しているもの、断絶しているものを如何にして繋ぎ合わせるかということなのです。特に、利休さんの時代には、裏切りに次ぐ裏切りが実際に起こっていて、断絶していることに人々が渴いていたのです。自分を裏切った人に一服差し上げるって凄い文化でしょう。それを千利休はやっているのです。だから、高山右近が侘茶にシビレたというのはそういうところだと思います。千利休はこの「和」というものを侘茶の中で命を懸けて構築しようとしていた人ですので、高山右近は利休の侘茶に心惹かれていったのだと思います。

#### ◆ 「敬」 = Respect

「敬」は Respect で、これは尊敬、敬愛、畏敬ですね。茶の湯では神を敬い人を愛す「敬神人愛」の修道ですね。キリスト教では「イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くしてあなたの神である主を愛せよ。』これが大切な第一の戒めです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じように

大切です。」(新約聖書／マタイの福音書 22・37-39)と聖書に刻み込むように書かれていることなのですね。要するに、二つの愛を説いているのです。神様を愛しましょう。隣人を愛しましょう。この隣人という時に、一番の隣人は自分なのです。だからここにもイエスは『あなたは隣人をあなた自身のように愛しなさい』と言っているのです。自分を愛して自分のために一服を点てるというのが、侘茶の真髄なのです。だから利休さんは、人のための前に、まず自分を愛して、自分に面と向かってお菓子をいただきお濃茶を点てて「ああ幸せだなあ」と感じた訳ですよ。それが侘茶です。自分自身を愛して、自分自身のためにお菓子をいただき、自分が点てたお茶をいただき、幸せだなあというのをお裾分けするのが、本来の茶の道なのです。自分で飲んで美味しいなあ…って思うことを、隣の人にもお裾分けして「美味しいね」と言われた時に、「和」と「敬」が自ずと生まれてくるのです。だから自分自身を Respect していなかったら、隣人への Respect なんてないですよ。

#### ◆「清」=Purity

次に「清」=Purity は、Puritan(キリスト教のプロテスタント)の語源ですね。ぼくは、織田信長の弟であり、国宝の『如庵』を造った織田有楽斎(織田信秀の11男)が「高山右近の茶の湯は清めの病を患っている」という言葉が遺されているのですが、これが不思議でならなかったの、ぼくはいろいろと考え調べてみたのです。そして結局、織田有楽斎という人は、高山右近と同門の人だと、すなわち高山右近がキリシタン大名であったように、織田有楽斎もキリスト教徒ではなかったかということが推察されるのです。だから彼は言葉を隠すことなく、「高山右近の茶の湯は清めの病を患っている」と言えたのだらうと思います。織田有楽斎がキリシタン大名であったという証拠はありませんが、彼らは同門であって、この地上の権力を失っても、同じように天国を目指していた人たちだったというのがぼくの結論です。この地上が神の国になることを願う、そういう侘茶を共に目指していたのではないかということ、完全に否定される証拠が見つかるまで、ぼくは言い続けるでしょうね。これはもう本に書きちゃっていますが、何処からも否定されていません。「清」というのは、身体の皮膚の内側にあるものが浄化される、心の清さをいつも求めていられる人ですね。ただこれは、生まれながらの人間には無理です。だって本来の人間は欲の塊ですからね。「清い」とは捨てることなのです。整理して何もかもを捨てた自分は神様に支えられているんだ、神様が私の命をくださったのだから、この命も神様にお返ししようというくらいの覚悟がなければ、清い生活って無理です。牧師って、皆さんから見るとくだらない生活をしていると見えるかもしれませんが、実は相当な戦いをしているのです。ぼくは、この世の欲は全部捨てました。財産も捨てて、最終的には自分の命さえも捨てる訳でしょう。その死を迎えたときの死に方とどう向かい合っているのかというものが、自分の清さに関わってくるのです。

#### ◆「寂」=Tranquility

そして、最後の「寂」=Tranquility、静寂です。これは、凄く大切なことです。生きることと死ぬことというのは凄く孤独ですよ。独りぼっちです。この孤独を感じるときというのは、仲間を失ったときです。自分は理解されていないと思ったときです。ぼくらは強いようで凄く弱いですよ。生きていても、ましてや死ぬときはね。作家の三浦綾子さんが、死ぬ間際にこう言われました。「私には死ぬ前に大仕事がある。それは死ぬ事」と言われたそうです。ぼくらは皆、まだ大仕事を控えていますよね。何とかなるわ…ではないのですよ。何ともならないのが、誰にも訪れる死です。確実に死を迎えるときに、自分自身どう向き合うのか、これを修行するのか侘茶なのです。分かるかなあ…。ここまでくるともう分からないでしょう。「ええ～、侘茶が死に備えること！」。でも、利休さんという人はそういう人でした。秀吉から「お前なんか死んじまえ」と言われたら、本当に自分の茶室に籠もって、みんなが見守っている中で切腹していくのです。その前にはお茶を点てて、愛用した道具は誰々に譲るようにと指示して、そして独りぼっちで死んでいくのですよ。

#### ◆質問タイム

- Q. 私自身、分け隔て無くさまざまなことに臨もうと思いつつも、侘茶への考えが矛盾していることが多いことに気づきました。一碗に込める思いで、自分自身にも隣人にもおもてなしができるといいですね。
- A. ぼくの毎朝の修行は、自分自身を心から愛して、自分を祝福して点てる一杯を「ああ、美味しかった」と言って飲めるかどうかということです。自分を心から尊敬して受け入れて、許し愛して、一碗のお茶を美味しいと思うように他の人にも点てることのできる修道が、茶の湯の目標でしょうね。だから、利休さんという人は、キリスト教をどこまで知っていたかは分からないけれども、あの時代にとんでもないことを考えていたと思うのです。「和敬清寂」を考えれば考えるほど不思議でなりませんね。ただ、その思いを誰よりも「そうだよね」、キリスト教用語で言えば「アーメン」って言ってお茶を振る舞っていたのは高山右近だろうと思うのです。だから、高山右近は利休七哲の筆頭に挙げられる人だと思います。

自分を愛し、自分の隣人を自分と同じように愛してもてなすことが「侘茶の真髄」、その通りでありたいものです！